

5 重複障害者の個別の指導計画の作成

重複障害のある児童生徒の指導については、一人一人の障害の程度や状態が違うことから、個に応じた指導を適切に行う必要があります。

児童生徒一人一人の実態を的確に把握して指導目標を設定し、指導内容や方法の工夫をする等、地域や学校の実態に応じた適切な個別の指導計画を作成することはとても大切なことです。

学習指導要領では、「重複障害者の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成すること」（小・中第1章第2節第7の1（5）、高第1章第2節第4款の3の（3））が、位置づけられています。重複障害者の指導に当たっては、個別の指導計画を作成し、一人一人の障害の実態や発達段階、特性に応じた指導をする必要があります。

最近では、「新障害者プラン」（障害者基本計画の重点施策5か年計画）の中で、「個別の支援計画」という概念が出てきましたが、「個別の指導計画」は、個々の児童生徒の実態に応じて適切な指導を行うために学校で作成されるもので、教育課程を具現化し、一人一人の指導目標・内容・方法を明確にして、きめ細かに指導するために作成するものとされているのに対し、「個別の支援計画」は地域で生活する一人一人の生涯にわたる支援を各関係機関が連携して効果的に実施するための計画で、保護者をはじめ、教育、福祉、医療、労働等が連携協力して支援するためのツール（道具）であるとされています。トータルプランとしての「個別の支援計画」の策定を踏まえて、学校における指導のための「個別の指導計画」が作成されるように工夫していくことが、今後の課題でもあります。

評価とその方法

A君は重度の肢体不自由があり、話すことができないために、担任の先生から「コミュニケーションをとることができない。」と評価されました。そのために、A君の通学していた学校で

は、A君に対して、ことばによる働きかけをやめてしまいました。また、周囲の人から、「A君は何を言ってもわからない。」と思われていて、重度の知的障害もあると評価されていました。

しかし、数年後、A君が学校卒業後に入所した施設では、A君にもパソコン等が利用できるように環境を整備し、実際にA君が、パソコンで文字が打てるように支援しました。その結果、施設の職員とA君との間に、パソコンの画面上の文字を通して、しだいにコミュニケーションをとることができるようになりました。また、周囲の人も、A君の気持ちや考えがだんだんわかるようになりました。A君は「やっとなんかのことを、周りの人がわかるようになってくれたのでとてもうれしい。」とパソコンの画面上に文字を打っています。

このような例は、担任の先生が、A君に対して多面的な観点から評価をすることができなかったことに最大の原因があると言えます。たとえ、ことばによるコミュニケーションをとることができなくても、A君のことばを代替できるコミュニケーション手段は、他にないのかを考えなければいけません。また、児童生徒の中に理解する力があっても、身体に障害があり、外的に表出手段を持たない児童生徒がいることも知っておく必要があります。A君の今ある状態と状況を多面的にとらえていかないと、いつまでもA君のような悲劇が起こる可能性があります。特に、重複障害のある児童生徒の評価については、障害の多様性による外界への発信が弱いこともあり、児童生徒一人一人の障害の程度や状態に応じた多面的な観点から評価していくことが重要です。

WHO（世界保健機関）では、2001年に国際生活機能分類（ICF：International Classification of Functioning, Disability and Health）を発表しました。ここでは、図1のように生活機能を心身機能・身体構造、活動、参加の3次元に分け、生活機能は健康状態や環境因子、個人因子に影響されることを力動的に示しています。

重複障害のある児童生徒の評価については、こ

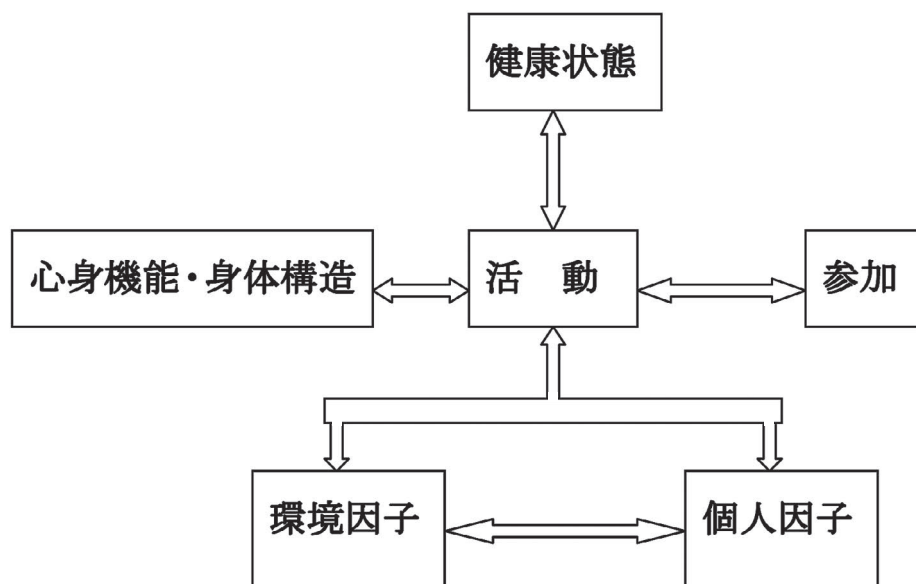


図1 ICFの相互作用図

のように単に障害があることのみを前提に評価するのではなく、例えば、コミュニケーションが阻害されている状況はどのような点にあるのか、阻害されている状況を改善するためにはその児童生徒がいる環境をどのように改善していかなければならないか等を総合的に考えて、多面的な観点で評価をしていく必要があります。

また、前述したように、重複障害のある児童生徒は、個別の指導計画を作成することが規定されています。個別の目標をたて、目標を達成できるように授業で実践し、的確な評価をして、次のス

テップにつなげる、PLAN（計画）→DO（実践）→SEE（評価）のサイクルを活用するようにしましょう。

この場合、目標があいまいだと評価もあいまいになる可能性があります。目指す目標をはっきり示して、その目標を達成できたか、もしくはできなかったかをはっきりさせることが大切です。また、達成できなかった場合は、その理由を考え、今後の課題点は何なのかを明確にして次のステップにつなげるようにすることが評価をするうえで大事な点だといえます。（大崎博史）